

科目概要

心理臨床専攻 修士課程

心理臨床専攻修士課程 開講科目 □臨床心理基礎必修科目

科目名	臨床心理学特論	4 単位
担当者	高橋 蔵人（前期）、小松原 智子（後期）	
テーマ	臨床心理学の領域と実践	
科目のねらい	<キーワード> 臨床心理学、臨床心理学面接、臨床心理学査定、臨床心理学的地域援助、心理臨床における倫理 <内容の要約> 心理臨床の実践に入る前に、心理臨床の基礎としての理論および実践領域における実態について学ぶ <学習目標> 臨床心理学の多様な理論・領域について、基本的な理解ができる。 臨床心理学の主たる領域の実践における基本的態度が理解できる。	
	前期は、高橋が担当し、専門家としての職責・基本姿勢と心理面接を行う上での枠組み、対象理解および援助法について広く学んでいく。またレポート発表や具体的事例を通して、臨床実践および連携の方法について理解を深める。 後期は、小松原が担当し、臨床心理学の基礎知識について論文や事例、ワークの体験を通して理解を深める。また、ライフサイクルにおける心理支援の視点や臨床家としてのセルフケア、専門家としての職責・倫理についても理解を深める。 前期 第 1.2 回 専門家としての基本姿勢と心理面接における枠組み 第 3.4 回 インテーク面接（生育歴等の情報収集・観察・発達検査ほか） 第 5.6 回 心理療法①精神分析・力動的心理療法 第 7.8 回 心理療法②家族療法 第 9.10 回 心理療法③集団療法・嗜癖臨床 第 11.12 回 心理療法④行動理論・認知行動療法・応用行動分析 第 13.14 回 心理療法⑤統合失調症の心理臨床 第 15 回 まとめ 後期 第 1～3 回 心理療法の基礎：人間性心理学（パーソン・センタード・アプローチ） 第 4～6 回 心理療法の基礎：フォーカシング指向心理療法（体験プロセス） 第 7.8 回 非言語・イメージを用いた支援（描画・箱庭） 第 9.10 回 ライフサイクルから考える心理的支援 第 11.12 回 産業・司法領域における心理臨床 第 13.14 回 臨床心理学における専門家としての職責・倫理、セルフケア 第 15 回 まとめ	
事前学習の内容 学習上の注意	発達心理学、青年心理学、社会心理学、学習心理学、乳幼児心理学、老年心理学などの臨床心理学の基礎となる理論や知見に関する知識を前提として講義する。	
本科目の関連科目	臨床心理面接特論Ⅰ・Ⅱ、臨床心理査定演習Ⅰ・Ⅱ、心理療法特論、臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ - ①②	
テキスト	使用しない	
参考文献	渡辺雄三『私説・臨床心理学の方法』金剛出版、2011 渡辺雄三・山田勝・高橋蔵人・石黒直生（編）『クライアントと臨床心理士』金剛出版、2016 土居健郎『新訂方法としての面接』医学書院、1992 成田善弘『新訂増補精神療法の第一歩』金剛出版、2007 福島哲夫、尾久裕紀ら（編）『公認心理師必携テキスト』改訂第2版 学研メディカル秀潤社、2020 池見陽『傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング』ナカニシヤ出版、2016 L.ラバポート『フォーカシング指向アートセラピー』誠心書房、2009 ドラ・M. カルフ・山中康裕監訳『カルフ箱庭療法入門 新版』誠信書房、1999 乾吉佑『働く人と組織のためのこころの支援』遠見書房、2011 R.S.ラザラス、S.フォルクマン『ストレスの心理学』実務教育出版、1996 上田琢哉『カウンセリングを倫理的に考える』岩崎学術出版社 4、2022	
成績評価 方法と基準	授業態度・議論への参加・レポート等の平常点を総合して評価する（100%）。全体で 60%以上を合格とする。	

科目名	臨床心理面接特論Ⅰ（心の支援に関する理論と実践）	2 単位																														
担当者	小松原 智子																															
テーマ	臨床心理面接の基礎を学ぶ																															
科目のねらい	<キーワード> 臨床心理面接、面接技法、受理面接、見立てと方針、治療構造、親子面接、遊戯療法 <内容の要約> 「臨床心理面接特論Ⅰ」は1年次前期開講の必須科目である。この授業では、心理専門職の業務のひとつである臨床心理面接について、特に、理論とその背景、基本的態度、受理面接、見立てと方針など成人や子どもの心理面接で必要となる臨床的な考え方や姿勢を学ぶ。 <学習目標> 心理面接の理論と技法、および基本的考え方と姿勢を理解し説明することができる。 クライアントの特性や水準に応じた支援やさまざまな状況への対応を学び、適用できる。心理面接を行う上での原則や倫理的諸問題を理解し説明することができる。																															
授業の進め方	授業では臨床心理面接の理論と実践について理解を深めるために、講義、各テーマに関する発表とディスカッション、事例検討などを行う。 <table><tr><td>第1回</td><td>心理面接の理論とその歴史的背景</td></tr><tr><td>第2回</td><td>心理面接の学び 研修、記録、SV、事例検討</td></tr><tr><td>第3回</td><td>心理面接の実践 基本的態度と応答、治療的距離、面接構造</td></tr><tr><td>第4回</td><td>心理面接の実践 受理面接</td></tr><tr><td>第5回</td><td>心理面接の実践 見立てと方針</td></tr><tr><td>第6回</td><td>心理面接の実践 引継ぎ、終結、中断</td></tr><tr><td>第7回</td><td>心理面接の実践問題 枠の守りと揺れ、危機対応</td></tr><tr><td>第8回</td><td>親子面接の実践 受理面接 親面接や親子面接の目的と対応</td></tr><tr><td>第9回</td><td>親子面接の実践 子ども・親・家族面接の構造とセラピスト間の協働</td></tr><tr><td>第10回</td><td>親子面接の実践問題 親や子どもの気持ちを聴き、問いに応える。 セラピストの内的反応との向き合い方</td></tr><tr><td>第11回</td><td>遊戯療法の理論 遊戯療法における遊び</td></tr><tr><td>第12回</td><td>遊戯療法の実践 見立てと方針</td></tr><tr><td>第13回</td><td>遊戯療法の実践 終結と中断</td></tr><tr><td>第14回</td><td>遊戯療法の実践問題 受容と制限</td></tr><tr><td>第15回</td><td>遊戯療法の実践問題 枠の守りと揺れ</td></tr></table>		第1回	心理面接の理論とその歴史的背景	第2回	心理面接の学び 研修、記録、SV、事例検討	第3回	心理面接の実践 基本的態度と応答、治療的距離、面接構造	第4回	心理面接の実践 受理面接	第5回	心理面接の実践 見立てと方針	第6回	心理面接の実践 引継ぎ、終結、中断	第7回	心理面接の実践問題 枠の守りと揺れ、危機対応	第8回	親子面接の実践 受理面接 親面接や親子面接の目的と対応	第9回	親子面接の実践 子ども・親・家族面接の構造とセラピスト間の協働	第10回	親子面接の実践問題 親や子どもの気持ちを聴き、問いに応える。 セラピストの内的反応との向き合い方	第11回	遊戯療法の理論 遊戯療法における遊び	第12回	遊戯療法の実践 見立てと方針	第13回	遊戯療法の実践 終結と中断	第14回	遊戯療法の実践問題 受容と制限	第15回	遊戯療法の実践問題 枠の守りと揺れ
第1回	心理面接の理論とその歴史的背景																															
第2回	心理面接の学び 研修、記録、SV、事例検討																															
第3回	心理面接の実践 基本的態度と応答、治療的距離、面接構造																															
第4回	心理面接の実践 受理面接																															
第5回	心理面接の実践 見立てと方針																															
第6回	心理面接の実践 引継ぎ、終結、中断																															
第7回	心理面接の実践問題 枠の守りと揺れ、危機対応																															
第8回	親子面接の実践 受理面接 親面接や親子面接の目的と対応																															
第9回	親子面接の実践 子ども・親・家族面接の構造とセラピスト間の協働																															
第10回	親子面接の実践問題 親や子どもの気持ちを聴き、問いに応える。 セラピストの内的反応との向き合い方																															
第11回	遊戯療法の理論 遊戯療法における遊び																															
第12回	遊戯療法の実践 見立てと方針																															
第13回	遊戯療法の実践 終結と中断																															
第14回	遊戯療法の実践問題 受容と制限																															
第15回	遊戯療法の実践問題 枠の守りと揺れ																															
事前学習の内容 学習上の注意	臨床心理学の基本的な知識を前提として、心理面接の実践を学ぶ。 参考図書や文献、資料をよんでおくこと。積極的なディスカッションで理解を深めること。																															
本科目の 関連科目	臨床心理面接特論Ⅱ、臨床心理学特論、心理療法特論Ⅰ・Ⅱ、臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ―①②																															
テキスト	資料を配布する。																															
参考文献	関連文献は授業内で適宜紹介、解説する。 鑪幹八郎・名島潤慈（2018）『心理臨床家の手引 [第4版]』誠信書房 一丸藤太郎・山本力他（1998）『精神分析的な心理療法の手引き』誠信書房 竹内健児（2015）『Q&A で学ぶ 心理療法の考え方・進め方』創元社 下山晴彦・伊藤良子・大塚義孝他（2003―2004）『臨床心理面接技法1～3』誠信書房 河合俊雄（2000）『心理臨床の基礎2 心理臨床の理論』岩波書店 田中康裕（2017）『心理療法の未来』創元社 津川律子（2020）『改訂増補 精神科臨床における心理アセスメント入門』金剛出版 松木邦裕（2016）『改訂増補 私説 対象関係論的心理療法入門―精神分析的アプローチのすすめ』金剛出版 永井徹（2021）『心理臨床の親面接―カウンセラーの基本的視点』北大路出版 竹内健児（2019）『Q & A で学ぶ 遊戯療法と親面接の考え方・進め方』創元社 飽田典子（1999）『遊戯法（プレイセラピー）―子どもの心理臨床入門』新曜社 大野木嗣子（2019）『はじめてのプレイセラピー: 効果的な支援のための基礎と技法』誠信書房 丹明彦（2019）『プレイセラピー入門―未来へと希望をつなぐアプローチ』遠見書房																															
成績評価 方法と基準	授業態度、討論への参加、レポート等の平常点を総合して評価する（100%）。 全体で60%以上を合格とする。																															

科目名	臨床心理面接特論Ⅱ	2単位
担当者	吉野 真紀	
テーマ	臨床心理面接の実践を学ぶ	
科目のねらい	<キーワード> 臨床心理面接、臨床心理アセスメント、クライアントーセラピスト関係、セラピストの資質、クライアント理解 <内容の要約> 心理臨床の専門業務のひとつである臨床心理面接について、面接に求められるセラピストの資質とさまざまな面接技法、クライアントーセラピスト関係、クライアントの心的世界の理解や見立てなど、その実践について学ぶ。 <学習目標> 臨床心理面接の実践における基本的知識・態度および専門的資質を修得できる。 セラピストとしての自分の特徴に気づき、臨床心理面接に活かすことができる。 事例を通じて、臨床心理面接の実践を想定することができる。	
授業の進め方	授業は講義およびワークやロールプレイやディスカッションを取り入れながら、専門的知識や技術を知的に理解するとともに体験的に習得する。臨床心理面接の実践につながるよう理解を深める。 第1回 臨床心理面接に求められるセラピストの資質 第2回 臨床心理面接における観察と想像の区別 第3回 臨床心理面接における心的現実 第4回 臨床心理面接におけるイメージ、表現 第5回 臨床心理面接における身体性・関係性 第6回 臨床心理面接における象徴的理解、非言語的メッセージ 第7～14回 さまざまな臨床面接技法と臨床実践例を学ぶ 第15回 振り返り・まとめ	
事前学習の内容 学習上の注意	○参考文献に挙げた図書を自習すること。 ○授業で学んだことや感じたことは、授業後忘れないうちに書き留めておくこと。 ○知識として頭で理解するだけでなく、自身の体験をもって深く学ぶ姿勢で臨んでほしい。	
本科目の関連科目	臨床心理面接特論Ⅰ、臨床心理学特論、心理療法特論、臨床心理実習Ⅰ	
テキスト	使用しない。適宜レジュメを配布する。	
参考文献	池見陽（1995）『心のメッセージを聴くー実感が語る心理学』講談社現代新書 織田尚生（1998）『心理療法と想像力』誠信書房 河合隼雄（1992）『心理療法序説』岩波書店 河合隼雄（2013）『こころの最終講義』新潮社 倉戸ヨシヤ（2011）『ゲシュタルト療法ーその理論と心理臨床例』駿河台出版 東山紘久（1982）『遊戯療法の世界』創元社 村瀬嘉代子（2018）『ジェネラリストとしての心理臨床家』金剛出版	
成績評価 方法と基準	評価方法は、授業への参加度や課題等への取り組み姿勢（主体的・積極的）70%、レポート30%で評価し、総合評価60点以上を合格とする。なお、2/3以上の出席がない場合は評価の対象とならない。	

科目名	臨床心理査定演習Ⅰ（心理的アセスメントに関する理論と実践）	2 単位
担当者	辻野 達也	
テーマ	心理検査を通して、被験者の心理的問題を含む行動や性格傾向を理解する。	
科目のねらい	<キーワード> 臨床心理査定, 心理検査, 援助計画 <内容の要約> 臨床心理査定は、臨床心理面接と同様に心理職（公認心理師、臨床心理士）の職務のひとつであり、その目的は援助対象者の行動特性や性格傾向をトータルに把握し、支援に役立てることである。 本演習では、臨床心理査定における主に心理検査について、実施法や結果の処理、解釈を学び、被験者への援助方策や計画を立てることができるようになることを目指す。また、心理検査をおこなう上での倫理的事項についても学ぶ。 <学習目標> ・さまざまな心理検査についての専門的知識・技法を習得し、主たる心理検査の実施、結果の処理、解釈、報告することができる。 ・心理検査を通して、クライアントの抱える心理的問題を見立て、適切な援助方策や計画を立てることができる。 ・心理検査をおこなう上での倫理的諸問題を理解することができる。	
授業の進め方	乳幼児から高齢までのさまざまな人々を対象に、知的側面、発達の側面、性格面、認知心理的側面の査定について代表的な心理検査の理論と実際を、演習を通じて学ぶ。 第1回 オリエンテーション 第2回 臨床領域と査定、検査の導入とテストバッテリー 第3～6回 投映法（描画検査：バウムテスト・風景構成法） 第7～8回 投映法（描画検査：人物画・家族画、SCT、P-F スタディ） 第9～12回 知能検査法（WISC） 第13～14回 質問紙法（Y-G 検査、MMPI、その他） 第15回 発達障害と心理査定（AQ、PARS-TR、ADI-R、その他）	
事前学習の内容 学習上の注意	各検査の実施法や解釈法を習得するために、授業以外や授業期間後も自主学習に努めること。	
本科目の関連科目	臨床心理査定演習Ⅱ、投映法特論	
テキスト	授業内で資料を配布する。	
参考文献	内容が多岐にわたるため、必要な文献は授業内で適宜紹介する。 ・A・プリフィテラ他編（2012）『WISC - IVの臨床的利用と解釈』日本文化科学社 ・E・O・リヒテンバーガー他（2008）「エッセンシャルズ心理アセスメントレポートの書き方」日本文化科学社 ・カレン・ポーランダー（1999）『樹木画によるパーソナリティの理解』ナカニシヤ出版 ・カール・コッホ（2010）『バウムテスト（第3版）—心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究』誠信書房 ・下山晴彦・黒田美保編（2016）『臨床心理学第16巻第1号—発達障害のアセスメント』金剛出版 ・津川律子（2010）『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房 ・上野一彦、松田修、小林玄、木下智子（2015）『日本版 WISC-IV による発達障害のアセスメント—代表的な指標パターンの解釈と事例紹介』日本文化科学社 ・山中康裕編（1984）『中井久夫著作集 別巻（1） H・Nakai 風景構成法』岩波学術出版社	
成績評価 方法と基準	各テーマにおける課題レポート（60%）および授業への取り組み姿勢（40%）により評価し、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	臨床心理査定演習Ⅱ	2単位
担当者	早川すみ江	
テーマ	心理検査の中でも主に投射法検査を通して、被験者の心理的問題を含めた行動やパーソナリティを深く把握、理解する。	
科目のねらい	<キーワード> 1.臨床心理査定, 2.投射法検査, 3.ロールシャッハ・テスト, 4.パーソナリティ, 5.精神力動的理解 <内容の要約> 臨床心理査定は、臨床心理面接と同様、臨床心理士・公認心理師の重要な業務のひとつであり、その目的は、援助対象者であるクライアントの良い面も悪い面も含めた行動やパーソナリティをトータルに把握し、理解することである。 本演習では、臨床心理査定の中の、主に投射法検査であるロールシャッハ・テストについて、実施法や結果の処理、解釈法などとともに、検査をおこなう上での倫理的事項についても学ぶ。 <学習目標> ・心理臨床の基礎となる対人関係能力をふまえ、適切な態度で投射法検査の実施ができる。 ・ロールシャッハ・テストについての専門的知識・技法を習得し、検査結果の処理について理解できる。 ・検査結果データの解釈を通して、クライアントの良い面も悪い面も含めた行動やパーソナリティをトータルに把握し、理解しようとのぞむことができる。 ・投射法検査をおこなう上での倫理的諸問題を理解することができる。	
授業の進め方	投射法検査の中のロールシャッハ・テストを取り上げ、検査の実施法から結果の処理の仕方および分析方法までを学習する。またロールシャッハ・テストの解釈仮説のベースとなる精神力動的な理解に基づく継起分析の方法を『精神力動論』をもとに学習する。 第1回：ロールシャッハ・テストとは 第2～4回：スコアリング法 第5～6回：実施法・実施法実習 第7～8回：結果の整理 第9回：形式分析 第10～14回：継起分析のための基礎知識および継起分析の方法 第15回：スコアリング確認	
事前学習の内容・学習上の注意	・紹介した専門機関でロールシャッハ・テストの被験者体験実習を行ってもらおう。 ・指定テキスト『精神力動論』の発表担当者は、時間内に発表できるよう簡潔に章の内容をまとめ、説明し、質問に答えられるよう十分な準備をして臨むこと。発表担当者以外も、事前に『精神力動論』を読んでおくこと。	
本科目の関連科目	臨床心理査定演習Ⅰ、投射法特論	
テキスト	・『改訂 新・心理診断法』片口安史著 金子書房（事務室より各自に貸し出しますので、購入の必要はありません） ・『精神力動論』小此木啓吾・馬場禮子著 金子書房（事務室より各自に貸し出しますので、購入の必要はありません）	
参考文献	・E・O・リヒテンバーガー他著『エッセンシャルズ心理アセスメントレポートの書き方』2008 日本文化科学社 ・加藤志ほ子著『ロールシャッハ・テストの所見の書き方』2016 岩崎学術出版	
成績評価方法と基準	課題レポート（80%）および授業への取り組み姿勢（20%）により評価し、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	臨床心理基礎実習	2 単位																
担当者	辻野 達也、小松原 智子、高橋 蔵人																	
テーマ	心理臨床の基本的知識、技能、態度の体験的学習																	
科目のねらい	<キーワード> 面接技法、ロールプレイ、受面接、アセスメント <内容の要約> 「臨床心理学基礎実習」は1 年次開講の必須科目であり、心理臨床活動における倫理や姿勢を学び、心理面接に必要な基礎的能力、技術を養うことを目的とする。前期は、基本技能の要点を学び、心理臨床の基盤となる対人的構えや感情理解など自己理解を深める。後期は、主に、ロールプレイや試行カウンセリングを通して、事例の見立てや面接の経過について理解を深める。 <学習目標> 心理面接を行う上で必要とされる基礎的な知識・技能を身につけることができる。 基本技能また学内実習施設において運営・受付実習を体験することで、今後の実際の面接への心構えが形成できる。																	
授業の進め方	授業の進行はグループ学習を基本とし、前期は面接に至るまでのさまざまな基礎技術や面接での応答技法を体験的に学び、後期に向けてロールプレイを用いた実習を行う。また、後期は、実際の面接場面について学ぶ。実際の面接場面でみられるような主訴や問題の設定・場面の設定によるロールプレイなどの実習、ディスカッションから面接の要点を学ぶ。後期には教員・研究員の面接陪席などの体験学習に入る。 <table><tr><td>第 1 回～第 2 回</td><td>前期オリエンテーション、カウンセリング基礎技法</td></tr><tr><td>第 3 回～第 8 回</td><td>ロールプレイ実習（応答練習）</td></tr><tr><td>第 9 回～第 13 回</td><td>ロールプレイの発表とディスカッション</td></tr><tr><td>第 14 回</td><td>前期の振り返りとまとめ</td></tr><tr><td>第 15 回</td><td>相談室実習オリエンテーション（7 月頃を予定）</td></tr><tr><td>第 16 回</td><td>後期オリエンテーション</td></tr><tr><td>第 17 回～第 29 回</td><td>ロールプレイの発表とディスカッション</td></tr><tr><td>第 30 回</td><td>後期の振り返りとまとめ</td></tr></table> その他、授業時間外に、ロールプレイ体験（カウンセラー役 3 回、クライアント役 3 回、計 6 回）を実施し、逐語録・面接記録を作成する。また、学内実習施設において、受付実習（電話応答実習）を体験する。		第 1 回～第 2 回	前期オリエンテーション、カウンセリング基礎技法	第 3 回～第 8 回	ロールプレイ実習（応答練習）	第 9 回～第 13 回	ロールプレイの発表とディスカッション	第 14 回	前期の振り返りとまとめ	第 15 回	相談室実習オリエンテーション（7 月頃を予定）	第 16 回	後期オリエンテーション	第 17 回～第 29 回	ロールプレイの発表とディスカッション	第 30 回	後期の振り返りとまとめ
第 1 回～第 2 回	前期オリエンテーション、カウンセリング基礎技法																	
第 3 回～第 8 回	ロールプレイ実習（応答練習）																	
第 9 回～第 13 回	ロールプレイの発表とディスカッション																	
第 14 回	前期の振り返りとまとめ																	
第 15 回	相談室実習オリエンテーション（7 月頃を予定）																	
第 16 回	後期オリエンテーション																	
第 17 回～第 29 回	ロールプレイの発表とディスカッション																	
第 30 回	後期の振り返りとまとめ																	
事前学習の内容 学習上の注意	学部で学んだ臨床心理学に関する授業を復習しておくこと。 実習の授業であることから、毎回の授業は積極的に参加すること。																	
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ－①																	
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。																	
参考文献	下山晴彦編『臨床心理学全書4 臨床心理実習論』誠信書房、2003 竹内 健児『Q & Aで学ぶ 心理療法の考え方・進め方』創元社、2015 津川律子『改訂増補 精神科臨床における心理アセスメント入門』金剛出版、2020 馬場禮子『精神分析的人格理論の基礎—心理療法を始める前に』岩崎学術出版社、2008 松木邦裕『耳の傾け方—こころの臨床家を目指す人たちへ』岩崎学術出版社、2015 鏑幹一郎・名島潤慈編『心理臨床家の手引き 第4 版』誠信書房、2018 遠藤裕乃『ころんで学ぶ心理療法—初心者のための逆転移入門』日本評論社、2003 渡辺雄三『私説・臨床心理学の方法—いかにクライアントを理解し、手助けするか』金剛出版、2011																	
成績評価 方法と基準	①授業への取り組み姿勢とディスカッションへの積極的参加 40%、②課題（発表資料、課題レポート）60%で評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。なお、前期 2／3 以上の出席、および後期 2／3 以上の出席がない場合は評価の対象とならない。																	

科目名	臨床心理実習Ⅰ－①（心理実践実習）	2 単位																																																										
担当者	小松原 智子・高橋 蔵人・辻野 達也・早川 徹 瀬地山葉矢（SV のみ）・早川すみ江*・福元 理英*・堀美和子*・千賀則史*・吉野真紀* *全体ケースカンファレンス、引継ぎカンファレンス、スーパーヴィジョンを担当																																																											
テーマ	学内実習を通して、心理臨床の知識と技能を習得する																																																											
科目のねらい	<キーワード> 学内実習、スーパーヴィジョン、ケース・カンファレンス、アセスメント <内容の要約> 学内実習（本学の心理臨床研究センター（心理臨床相談室）での実習、学内教員によるスーパーヴィジョン、ケース・カンファレンスへの参加およびケース報告や検討等）を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していく力を養う。 <学習目標> 心理臨床における基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していくことができる。																																																											
授業の進め方	<table><tr><td>第 1 回</td><td>相談室打ち合わせ会</td></tr><tr><td>第 2、3 回</td><td>オリエンテーション</td></tr><tr><td>第 4 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 5、6 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 7、8 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 9 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 10、11 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 12 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 13 回</td><td>第 1 回 リサーチカンファレンス</td></tr><tr><td>第 14、15 回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr><tr><td>第 16 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 17、18 回</td><td>講演会（シンポジウム）</td></tr><tr><td>第 19、20 回</td><td>ケース研究実習</td></tr><tr><td>第 21、22 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 23 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 24 回</td><td>第 2 回 リサーチカンファレンス</td></tr><tr><td>第 25、26 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 27 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 28 回</td><td>第 2 回 相談室打ち合わせ会</td></tr><tr><td>第 29、30 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 31 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 32、33 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 34 回</td><td>第 3 回 リサーチカンファレンス</td></tr><tr><td>第 35、36 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 37 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 38、39 回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr><tr><td>第 40、41 回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr><tr><td>第 42、43 回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr><tr><td>第 44 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr></table> 【学内実習】 □原則として、学内心理相談室における 1 年次の実習は、6 月の学内実習説明会ののち、ケース担当実習を 30 時間程度担当すること。〔内訳：インテーク等の陪席、心理検査、心理面接等を 1～2 ケース（10 時間程度）以上担当。担当ケース 1 セッションにつき、事前・事後学習（準備、記録、検討等）を 1 時間程度行い、1 セッションにつき、スーパーヴィジョン 1 時間程度受けること。〕 □相談室の実習では、受付実習や陪席とともに、心理面接および心理検査を担当し、担当スーパーヴァイザーらによるスーパーヴィジョンを受ける。また実習内容について、学内実習日誌にまとめる。		第 1 回	相談室打ち合わせ会	第 2、3 回	オリエンテーション	第 4 回	全体ケースカンファレンス	第 5、6 回	ケースカンファレンス	第 7、8 回	ケースカンファレンス	第 9 回	全体ケースカンファレンス	第 10、11 回	ケースカンファレンス	第 12 回	全体ケースカンファレンス	第 13 回	第 1 回 リサーチカンファレンス	第 14、15 回	ケースカンファレンス、振り返り	第 16 回	全体ケースカンファレンス	第 17、18 回	講演会（シンポジウム）	第 19、20 回	ケース研究実習	第 21、22 回	ケースカンファレンス	第 23 回	全体ケースカンファレンス	第 24 回	第 2 回 リサーチカンファレンス	第 25、26 回	ケースカンファレンス	第 27 回	全体ケースカンファレンス	第 28 回	第 2 回 相談室打ち合わせ会	第 29、30 回	ケースカンファレンス	第 31 回	全体ケースカンファレンス	第 32、33 回	ケースカンファレンス	第 34 回	第 3 回 リサーチカンファレンス	第 35、36 回	ケースカンファレンス	第 37 回	全体ケースカンファレンス	第 38、39 回	ケースカンファレンス、振り返り	第 40、41 回	引継ぎカンファレンス	第 42、43 回	引継ぎカンファレンス	第 44 回	全体ケースカンファレンス
第 1 回	相談室打ち合わせ会																																																											
第 2、3 回	オリエンテーション																																																											
第 4 回	全体ケースカンファレンス																																																											
第 5、6 回	ケースカンファレンス																																																											
第 7、8 回	ケースカンファレンス																																																											
第 9 回	全体ケースカンファレンス																																																											
第 10、11 回	ケースカンファレンス																																																											
第 12 回	全体ケースカンファレンス																																																											
第 13 回	第 1 回 リサーチカンファレンス																																																											
第 14、15 回	ケースカンファレンス、振り返り																																																											
第 16 回	全体ケースカンファレンス																																																											
第 17、18 回	講演会（シンポジウム）																																																											
第 19、20 回	ケース研究実習																																																											
第 21、22 回	ケースカンファレンス																																																											
第 23 回	全体ケースカンファレンス																																																											
第 24 回	第 2 回 リサーチカンファレンス																																																											
第 25、26 回	ケースカンファレンス																																																											
第 27 回	全体ケースカンファレンス																																																											
第 28 回	第 2 回 相談室打ち合わせ会																																																											
第 29、30 回	ケースカンファレンス																																																											
第 31 回	全体ケースカンファレンス																																																											
第 32、33 回	ケースカンファレンス																																																											
第 34 回	第 3 回 リサーチカンファレンス																																																											
第 35、36 回	ケースカンファレンス																																																											
第 37 回	全体ケースカンファレンス																																																											
第 38、39 回	ケースカンファレンス、振り返り																																																											
第 40、41 回	引継ぎカンファレンス																																																											
第 42、43 回	引継ぎカンファレンス																																																											
第 44 回	全体ケースカンファレンス																																																											

	□相談室の実習では、実習科目担当教員、スーパーヴァイザー、並行ケース担当相談員、相談室スタッフであるその他の心理臨床専攻の教員・研究員から指導を受け、支援や連携について実践的に学ぶ。 【ケースカンファレンス】 □アセスメントについての検討、クライアントの心の動きの理解、セラピストの介入の仕方、面接過程全体についての検討など焦点を絞り、主に2年生によるケース発表に対して検討を行う。臨床心理実習Ⅰ-②と合同で行う。 □全体ケースカンファレンスは、毎月1回（年間9回）、学内相談室に所属する教員・研究員全体で行う。 □1月には引継ぎケース・カンファレンスでのケース検討に参加する。 【ケース研究実習】 □事例研究の学習と発表を行う 【心理臨床研究センター（心理臨床相談室）の活動】 □心理相談室打ち合わせ会、リサーチカンファレンス、ケースカンファレンス、講演会・シンポジウムなどの開催準備や参加、相談室の運営、紀要編集などを行う。
事前学習の内容 学習上の注意	参考文献など、授業に関連する文献を読みながら学習を進めていくこと。
本科目の関連科目	臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ-②（心理実践実習）、臨床心理実習Ⅰ-③（心理実践実習）
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	大塚義孝他監修，下山晴彦編『臨床心理学全書4 臨床心理実習論』誠信書房，2003 鑓幹八郎・名島潤慈編『心理臨床家の手引[第4版]』誠信書房，2018 竹内健児『100のワークで学ぶカウンセリングの見立てと方針』創元社，2021 竹内健児『Q & Aで学ぶ 遊戯療法と親面接の考え方・進め方』創元社，2019 小俣和義『親子面接のすすめ方—子どもと親をつなぐ心理臨床』金剛出版，2006 飽田典子『遊戯法（プレイセラピー）—子どもの心理臨床入門』新曜社，1999 田中千穂子『心理臨床への手引き—初心者への問いに答える』東京大学出版会，2016 河合隼雄『カウンセリングの実践問題』誠信書房，1996 熊倉伸宏『面接法』新興医学出版社，2002 他，授業で随時紹介する。
成績評価 方法と基準	①ディスカッションへの参加姿勢 20%、②課題（レポート、学内実習日誌）の提出と内容評価 40%、③学内実習への取り組み（相談活動と連携、及びSVへの取り組み。事例の適切な理解と対応。相談活動に関する手引きやガイドラインの遵守。心理臨床研究センターの活動全般に関する責任感、主体性、積極性のある取り組み）40%で評価し、総合評価60点以上を合格とする。

科目名	臨床心理実習Ⅰ-②（心理実践実習）		4単位																																																
担当者	小松原 智子・高橋 蔵人・辻野 達也・早川 徹 瀬地山葉矢（SVのみ）・早川すみ江*・福元 理英*・堀美和子*・千賀則史*・吉野真紀* *全体ケースカンファレンス、引継ぎカンファレンス、スーパーヴィジョンを担当																																																		
テーマ	学内実習を通して、心理臨床の知識と技能を習得する																																																		
科目のねらい	<キーワード> 学内実習、スーパーヴィジョン、ケース・カンファレンス、アセスメント <内容の要約> 学内実習（本学の心理臨床研究センター（心理臨床相談室）での実習、学内教員によるスーパーヴィジョン、ケース・カンファレンスへの参加およびケース報告や検討等）を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していく力を養う。 <学習目標> 心理臨床における基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していくことができる。																																																		
授業の進め方	<table><tr><td>第 1、 2 回</td><td>オリエンテーション</td></tr><tr><td>第 3 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 4、 5 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 6、 7 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 8 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 9、 10 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 11 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 12 回</td><td>ケース研究実習（オリエンテーション）</td></tr><tr><td>第 13、 14 回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr><tr><td>第 15 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 16、 17 回</td><td>ケース研究実習</td></tr><tr><td>第 18、 19 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 20 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 21、 22 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 23 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 24、 25 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 26 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 27、 28 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 29、 30 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 31 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 32、 33 回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr><tr><td>第 34、 35 回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr><tr><td>第 36、 37 回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr><tr><td>第 38 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr></table> 【学内実習】 □原則として、学内心理相談室における 2 年次のケース担当実習は 150 時間程度担当すること。 〔内訳：インターク等の陪席、心理検査、心理面接等を 3～4 ケース（60 時間程度）以上担当する。また、1 セッションにつき、事前・事後学習（準備、記録、検討等）を 1 時間程度行い、1～2 セッションにつき、スーパーヴィジョン 1 時間程度受けること。〕 □相談室の実習では、受付実習や陪席とともに、心理面接および心理検査を担当し、担当スーパーヴァイザーらによるスーパーヴィジョンを受ける。また、実習内容について学内実習日誌にまとめる。 □相談室の実習では、実習科目担当教員、スーパーヴァイザー、並行ケース担当相談員、相談室スタッフであるその他の心理臨床専攻の教員・研究員から指導を受け、支援や連携について実践的に学ぶ。 【ケースカンファレンス】 □アセスメントについての検討、クライアントの心の動きの理解、セラピストの介入の仕方、面接過程全体についての検討など、焦点を絞ったケース検討を行う。臨床心理実習Ⅰ-①と合同で行う。 □全体ケースカンファレンスは、毎月 1 回（年間 9 回）、学内相談室に所属する教員・研究員全体で行う。			第 1、 2 回	オリエンテーション	第 3 回	全体ケースカンファレンス	第 4、 5 回	ケースカンファレンス	第 6、 7 回	ケースカンファレンス	第 8 回	全体ケースカンファレンス	第 9、 10 回	ケースカンファレンス	第 11 回	全体ケースカンファレンス	第 12 回	ケース研究実習（オリエンテーション）	第 13、 14 回	ケースカンファレンス、振り返り	第 15 回	全体ケースカンファレンス	第 16、 17 回	ケース研究実習	第 18、 19 回	ケースカンファレンス	第 20 回	全体ケースカンファレンス	第 21、 22 回	ケースカンファレンス	第 23 回	全体ケースカンファレンス	第 24、 25 回	ケースカンファレンス	第 26 回	全体ケースカンファレンス	第 27、 28 回	ケースカンファレンス	第 29、 30 回	ケースカンファレンス	第 31 回	全体ケースカンファレンス	第 32、 33 回	ケースカンファレンス、振り返り	第 34、 35 回	引継ぎカンファレンス	第 36、 37 回	引継ぎカンファレンス	第 38 回	全体ケースカンファレンス
第 1、 2 回	オリエンテーション																																																		
第 3 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 4、 5 回	ケースカンファレンス																																																		
第 6、 7 回	ケースカンファレンス																																																		
第 8 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 9、 10 回	ケースカンファレンス																																																		
第 11 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 12 回	ケース研究実習（オリエンテーション）																																																		
第 13、 14 回	ケースカンファレンス、振り返り																																																		
第 15 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 16、 17 回	ケース研究実習																																																		
第 18、 19 回	ケースカンファレンス																																																		
第 20 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 21、 22 回	ケースカンファレンス																																																		
第 23 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 24、 25 回	ケースカンファレンス																																																		
第 26 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 27、 28 回	ケースカンファレンス																																																		
第 29、 30 回	ケースカンファレンス																																																		
第 31 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 32、 33 回	ケースカンファレンス、振り返り																																																		
第 34、 35 回	引継ぎカンファレンス																																																		
第 36、 37 回	引継ぎカンファレンス																																																		
第 38 回	全体ケースカンファレンス																																																		

	□1 月には引継ぎケース・カンファレンスでのケース検討に参加する。 【参考】 公認心理師の資格取得を目指す場合には、大学院修了までに、学内実習及び学外実習の総実習時間が計 450 時間以上となること。そのうち担当ケース（心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等）に関する実習時間は計 270 時間（うち、学外施設における当該実習時間は 90 時間以上行うこと）となること。
事前学習の内容 学習上の注意	参考文献など、授業に関連する文献を読みながら学習を進めていくこと。
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ－①
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	竹内健児『100のワークで学ぶカウンセリングの見立てと方針』創元社、2021 竹内健児『Q & A で学ぶ 心理療法の考え方・進め方』創元社、2015 小俣和義『親子面接のすすめ方―子どもと親をつなぐ心理臨床』金剛出版、2006 山本力・鶴田和美編『心理臨床家のための「事例研究」の進め方』北大路書房、2001 津川律子・遠藤裕乃著『初心者のための臨床心理学研究実践マニュアル』金剛出版、2011 松木邦裕『改訂増補 私説対象関係論的心理療法入門―精神分析的アプローチのすすめ』金剛出版、2016 成田善弘『セラピストのための面接技法』金剛出版、2003 栗原和彦『心理臨床家の個人開業』星和書店、2011
成績評価 方法と基準	①ディスカッションへの参加姿勢 20%、②課題（カンファレンス発表レジュメ、発表内容、レポート、学内実習日誌）の提出と内容評価 40%、③学内実習への取り組み（相談活動と連携、及びSVへの取り組み。事例の適切な理解と対応。相談活動に関する手引きやガイドラインの遵守。心理臨床研究センターの活動全般に関する責任感、主体性、積極性のある取り組み）40%で評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。

科目名	臨床心理実習Ⅰ－③（心理実践実習）	2 単位
担当者	辻野 達也・小松原 智子・高橋 蔵人 瀬地山葉矢*・福元 理英*・早川すみ江*・堀美和子*・千賀則史*・吉野真紀* *巡回指導担当	
テーマ	学外施設での実習を通じて、心理臨床活動の実際的な知識と技術を学ぶ。	
科目のねらい	<キーワード> 学外実習、心理職業務の実際、心理的支援、他職種連携と地域支援、職業倫理と法的義務 <内容の要約> 学外実習（学外施設での実習）と事前・事後の学習を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、心理的支援の実際について理解を深め、支援を実践していく力を養う。学外施設では実習先の指導担当者および大学の実習担当教員（各実習施設の指導を担当する巡回指導教員）による指導のもとに実務を体験し、実践を通じて心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務などを学ぶ。 <学習目標> ・心理臨床とその近接領域に関する専門知識および基礎となる対人関係能力をふまえて、さまざまな臨床場面、多様な対象に適切に臨むことができる。 ・心理臨床の実務を体験し、心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務について理解することができる。	
授業の進め方	【授業】 第1・2回：第1回学外実習オリエンテーション 第3・4回：第2回学外実習オリエンテーション 第5・6回：事前学習（福祉・教育・見学実習に向けて） 第7回：事前学習（医療） 第8・9回：見学実習 第10回：見学実習後指導・課題検討 第11・12回：実習先指導（1ヶ所目継続実習） 第13回：中間振り返り・課題検討 第14・15回：実習報告・振り返り 【学外実習】 <実習期間・内容> ・学外実習施設における実習は、1年次後期より開始する。 ・1年次においては、見学を主とする実習（1日）1箇所に参加し、その後、原則1箇所、実習施設ごとに指定された日程で、10日間（毎週の継続、または連続した日程・1日6時間程度）の実習を行う。 ・実習生は、支援に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、（ア）から（オ）の事項について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員（巡回指導教員）による指導を受けて修得していく。 （ア）心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等の知識及び技能の修得 （イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成 （ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ （エ）多職種連携及び地域連携 （オ）臨床心理士及び公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解 <実習準備・実習指導> ・実習先が決まった実習生は、「実習の手引き」（授業内で配布）を熟読し、事前準備や実習計画書の作成を行い、実習担当教員（巡回指導教員）から、学外施設への実習事前訪問に関する打ち合わせや指導を受ける。 ・実習生は、学外実習施設の実習指導者および実習担当教員と、事前訪問による打ち合わせ（実習オリエンテーション）や施設見学を行う。 ・実習期間中は、学外実習施設の指導担当者の指導を受けて施設実習を行い、実習報告を毎	

	回作成すると同時に、実習担当教員による実習指導や施設での訪問指導を受ける。訪問指導は 10 日間の実習の場合、5 回につき 1 回、計 2 回受ける。 <参考> 公認心理師の資格取得を目指す場合には、以下の実習時間が必要とされる。2 年間で原則、下記の領域および時間数を行うものとする。 ・学外施設での担当ケースに関する実習の時間は 90 時間以上とする（なお、学内実習と合わせた担当ケースの実習時間数は 270 時間以上とする）。 ・実習施設は、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の 5 分野うち、医療機関は必須とし、3 分野以上の施設において実習を受けることが望ましい。医療機関以外の施設においては、見学を中心とする実習も含む。
事前学習の内容 学習上の注意	・学外実習は原則毎週の継続、または連続した日程で行うこと ・各実習先に必要な基礎知識や心理検査技法を事前に勉強しておくこと
本科目の 関連科目	臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ－①
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	・津川律子・橘玲子編『心理職を目指す大学院生のための精神科実習ガイド』誠信書房、2022 ・津川律子・篠竹利和『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房、2010 ・鏑幹一郎・名島潤慈『心理臨床家の手引[第 4 版]』誠信書房、2018 ・滝川一廣『子どものための精神医学』医学書院、2017 ・東畑開人『居るのはつらいよーケアとセラピーについての覚書』医学書院、2019 ・一般社団法人日本公認心理師養成機関連盟編『公認心理師養成の実習ガイド』日本評論社、2019 ・窪田彰『精神科デイケアの始め方・進め方』、2004 ・窪田彰編『多機能型精神科診療所による地域づくり チームアプローチによる包括的ケアシステム』、2016 ・日本精神科病院協会監修 岸本年史編著『精神科研修ハンドブック』海馬書房、2005 ・笠原嘉著『予診・初診・初期治療 精神科選書Ⅰ』星和書店、2007 ・全国情緒障害児短期治療施設協議会編『心をはぐくむⅢー総合環境療法の臨床ー』、2002 ・森田喜治『児童養護施設と被虐待児ー施設内心理療法家からの提言』創元社、2006 ・橋本和明『虐待と非行臨床』創元社、2004 ・黒田美保著『これからの発達障害のアセスメント：支援の一步となるために』、金子書房、2015
成績評価 方法と基準	以下の A の項目が達成されていることを条件とし、B の各項目について評価して総合評価 60 点以上を合格とする。 A：①事前・事後の授業での発表、1 箇所の見学実習 ②1 箇所 10 日程度での施設での実習 B：①事前学習による実習施設の理解、事前準備や打ち合わせでの積極的調整。②心理的支援の基本的態度・知識・技術の修得。多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務等についての理解。③実習態度（社会性・責任感・主体性・協調性・関係づくりなど）。④実習日誌等の実習記録の適切な整備。⑤実習報告書の内容と発表、実習体験の振り返りと自己の課題の理解

科目名	臨床心理実習Ⅰ－④（心理実践実習）	2単位
担当者	辻野 達也・小松原 智子・高橋 蔵人 瀬地山葉矢*・福元 理英*・早川すみ江*・堀美和子*・千賀則史*・吉野真紀* *巡回指導担当	
テーマ	学外施設での実習を通じて、心理臨床活動の実際的な知識と技術を学ぶ。	
科目のねらい	<キーワード> 学外実習、心理職業務の実際、心理的支援、他職種連携と地域支援、職業倫理と法的義務 <内容の要約> 学外実習（学外施設での実習）と事前・事後の学習を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、心理的支援の実際について理解を深め、支援を実践していく力を養う。学外施設では実習先の指導担当者および大学の実習担当教員（各実習施設の指導を担当する巡回指導教員）による指導のもとに実務を体験し、実践を通じて心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務などを学ぶ。 <学習目標> ・心理臨床とその近接領域に関する専門知識および基礎となる対人関係能力をふまえて、さまざまな臨床場面、多様な対象に適切に臨むことができる。 ・心理臨床の実務を体験し、心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務について理解することができる。	
授業の進め方	【授業】 第01～05回：事前学習（医療・福祉・教育） 第06～09回：学外実習 第10～15回：実習報告会・まとめ 【学外実習】 <実習期間・内容> ・1年次後期学外実習を終えた者に対して、2年次前期より、学外実習施設における実習を開始する。 ・原則1箇所、実習施設ごとに指定された日程で、10日間（毎週の継続、または連続した日程・1日6時間程度）の実習を行う。 ・実習生は、支援に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、（ア）から（オ）の事項について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員（巡回指導教員）による指導を受けて修得していく。 （ア）心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等の知識及び技能の修得 （イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成 （ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ （エ）多職種連携及び地域連携 （オ）臨床心理士及び公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解 <実習準備・実習指導> ・実習先が決まった実習生は、「実習の手引き」（授業内で配布）を熟読し、事前準備や実習計画書の作成を行い、実習担当教員（巡回指導教員）から、学外施設への実習事前訪問に関する打ち合わせや指導を受ける。 ・実習生は、学外実習施設の実習指導者および実習担当教員と、事前訪問による打ち合わせ（実習オリエンテーション）や施設見学を行う。 ・実習期間中は、学外実習施設の指導者の指導を受けて施設実習を行い、実習報告を毎回作成すると同時に、実習担当教員による実習指導や施設での訪問指導を受ける。 <参考> 公認心理師の資格取得を目指す場合には、以下の実習時間が必要とされる。2年間で原則、下記の領域および時間数を行うものとする。 ・学外施設での担当ケースに関する実習の時間は90時間以上とする（なお、学内実習と	

	合わせた担当ケースの実習時間数は 270 時間以上とする)。 ・実習施設は、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の 5 分野うち、医療機関は必須とし、3 分野以上の施設において実習を受けることが望ましい。医療機関以外の施設においては、見学を中心とする実習も含む。 ・訪問指導は 10 日間の実習の場合、5 回につき 1 回、計 2 回受ける。
事前学習の内容 学習上の注意	・学外実習は原則毎週の継続、または連続した日程で行うこと ・各実習先に必要な基礎知識や心理検査技法を事前に勉強しておくこと
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ－②、臨床心理実習Ⅰ－③、⑤
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	・津川律子・橘玲子編『心理職を目指す大学院生のための精神科実習ガイド』誠信書房、2022 ・津川律子・篠竹利和『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房、2010 ・鑓幹八郎・名島潤慈『心理臨床家の手引[第 4 版]』誠信書房、2018 ・滝川一廣『子どものための精神医学』医学書院、2017 ・一般社団法人日本公認心理師養成機関連盟編『公認心理師養成の実習ガイド』日本評論社、2019 ・東畑開人『居るのはつらいよーケアとセラピーについての覚書』医学書院、2019 ・窪田彰『精神科デイケアの始め方・進め方』、2004 ・窪田彰編『多機能型精神科診療所による地域づくり チームアプローチによる包括的ケアシステム』、2016 ・日本精神科病院協会監修 岸本年史編著『精神科研修ハンドブック』海馬書房、2017 ・笠原嘉著『予診・初診・初期治療 精神科選書Ⅰ』診療新社、2007 ・全国情緒障害児短期治療施設協議会編『心をはぐくむⅢー総合環境療法の臨床ー』、2002 ・森田喜治『児童養護施設と被虐待児ー施設内心理療法家からの提言』創元社、2006 ・橋本和明『虐待と非行臨床』創元社、2004 ・黒田美保著『これからの発達障害のアセスメント：支援の一步となるために』、金子書房、2015
成績評価 方法と基準	以下の A の項目が達成されていることを条件とし、B の各項目について評価して総合評価 60 点以上を合格とする。 A：①事前・事後の授業での発表、 ②1 箇所 10 日程度での施設での実習 B：①事前学習による実習施設の理解、事前準備や打ち合わせでの積極的調整。②心理的支援の基本的態度・知識・技術の修得。多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務等についての理解。③実習態度（社会性・責任感・主体性・協調性・関係づくりなど）。④実習日誌等の実習記録の適切な整備。⑤実習報告書の内容と発表、実習体験の振り返りと自己の課題の理解

科目名	臨床心理実習Ⅱ	1 単位
担当者	小松原智子、辻野 達也、高橋 蔵人	
テーマ	他機関の専門家との連携方法について実践的に学び、他機関専門家の臨床や研究の知を学ぶ。 また、心理臨床相談室の組織運営に携わる中で組織内関係についても学ぶ。	
科目のねらい	<キーワード> 他機関との連携、リサーチカンファレンス、講演会、事例研究、組織内連携 <内容の要約> 講義や演習・その他の実習で学んだことを実践する場としての、学内心理臨床相談室（心理臨床研究センター）において、相談室運営に携わる一員として役割意識をもち、相談室内の連携・活動・事例研究の方法について学ぶ。 また、リサーチカンファレンス、講演会等の企画や開催に関わるなかで、学外の専門機関の専門家との連携について実践的に学び、他職種の専門家の臨床や研究の知を学ぶ。 <学習目標> ・心理臨床相談室の運営に積極的に関わる中で、組織内での円滑な行動・連携・協力を行うことができる。 ・リサーチカンファレンスや他機関との連携会議に関わる中で、企画の力や他機関の専門家との連携の仕方について学び、多職種の知見を理解することができる。	
授業の進め方	時間割上は火曜日月 1 回程度。 第 1、2 回 : 心理臨床相談室打ち合わせ会①、相談室活動 第 3 回 : リサーチカンファレンス① 第 4、5 回 : 講演会 第 6 回 : リサーチカンファレンス② 第 7、8 回 : 他機関との連携 第 9、10 回 : 心理臨床相談室打ち合わせ会②、相談室活動 第 11 回 : リサーチカンファレンス③ 他機関との連携は、リサーチカンファレンスや講演会等の企画や開催打ち合わせ等とする。その他、紀要（事例研究）に関する指導を受け、紀要に関わる活動にも携わることをとする。	
事前学習の内容 学習上の注意	院生同士の協力や積極的な参加の姿勢が求められる。	
本科目の 関連科目	臨床心理実習Ⅰー①、臨床心理実習Ⅰー②	
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。	
参考文献	リサーチカンファレンスや講演会にお招きする専門家の論文・著書	
成績評価 方法と基準	各役割における参加姿勢 70%、課題（レポート）の提出と内容評価 30%	

科目名	心理学研究法特論	2 単位																																																												
担当者	千賀則史・吉野 真紀・早川 すみ江・堀 美和子・福元 理英																																																													
テーマ	修士論文作成の基礎																																																													
科目のねらい	<キーワード> 実証的研究、研究倫理、研究方法、質的研究、研究計画 <内容の要約> 本特論の目的は、心理学の実証的な研究についての理解を深めることを通して修士論文研究（臨床心理学に関わる研究）を推進し、研究論文を作成する基礎的な力を養うことである。 <学習目標> ① 研究の意義や研究の進め方、研究倫理を理解できる。 ② 代表的な臨床心理学の研究手法（面接法、質問紙調査法、質的研究、事例研究法、検査法など）を学び、それを説明することができる。 ③ 修士論文の研究計画書を作成することができる。 ④ 論文を批判的に読む力を身につけることができる。																																																													
授業の進め方	授業の進め方は講義だけでなく、各自の発表（研究方法各論、研究計画書、関連論文の詳読）を取り入れて進める。講義は以下のスケジュールで進める予定。 <table><tr><td>第 1 回</td><td>「心理学研究法特論」のオリエンテーション：</td><td>千賀</td><td>(4/7)</td></tr><tr><td>第 2 回</td><td>研究計画書の書き方・研究倫理：</td><td>千賀</td><td>(4/7)</td></tr><tr><td>第 3 回</td><td>研究法各論（質問紙調査法）：</td><td>吉野</td><td>(4/21)</td></tr><tr><td>第 4 回</td><td>研究法各論（事例研究法）：</td><td>早川</td><td>(4/21)</td></tr><tr><td>第 5 回</td><td>研究法各論（実践研究）：</td><td>堀</td><td>(5/12)</td></tr><tr><td>第 6 回</td><td>研究法各論（実験・検査法）：</td><td>福元</td><td>(5/12)</td></tr><tr><td>第 7 回</td><td>研究法各論（面接法・質的研究）：</td><td>千賀</td><td>(5/26)</td></tr><tr><td>第 8 回</td><td>研究法各論（介入研究）：</td><td>千賀</td><td>(5/26)</td></tr><tr><td>第 9 回</td><td>各自の研究計画書の発表と討論（1）：</td><td>千賀</td><td>(6/9)</td></tr><tr><td>第 10 回</td><td>各自の研究計画書の発表と討論（2）：</td><td>千賀</td><td>(6/9)</td></tr><tr><td>第 11 回</td><td>各自の研究計画書の発表と討論（3）：</td><td>千賀</td><td>(6/23)</td></tr><tr><td>第 12 回</td><td>関連論文講読：</td><td>千賀</td><td>(6/23)</td></tr><tr><td>第 13 回</td><td>関連論文講読：</td><td>千賀</td><td>(7/7)</td></tr><tr><td>第 14 回</td><td>関連論文購読：</td><td>千賀</td><td>(7/7)</td></tr><tr><td>第 15 回</td><td>まとめと後期以後の修論の取り組み：</td><td>千賀</td><td>(7/23)</td></tr></table> 各論については履修者の研究で用いる可能性がある研究法を優先的に学ぶように配慮するため、変更の可能性がある。		第 1 回	「心理学研究法特論」のオリエンテーション：	千賀	(4/7)	第 2 回	研究計画書の書き方・研究倫理：	千賀	(4/7)	第 3 回	研究法各論（質問紙調査法）：	吉野	(4/21)	第 4 回	研究法各論（事例研究法）：	早川	(4/21)	第 5 回	研究法各論（実践研究）：	堀	(5/12)	第 6 回	研究法各論（実験・検査法）：	福元	(5/12)	第 7 回	研究法各論（面接法・質的研究）：	千賀	(5/26)	第 8 回	研究法各論（介入研究）：	千賀	(5/26)	第 9 回	各自の研究計画書の発表と討論（1）：	千賀	(6/9)	第 10 回	各自の研究計画書の発表と討論（2）：	千賀	(6/9)	第 11 回	各自の研究計画書の発表と討論（3）：	千賀	(6/23)	第 12 回	関連論文講読：	千賀	(6/23)	第 13 回	関連論文講読：	千賀	(7/7)	第 14 回	関連論文購読：	千賀	(7/7)	第 15 回	まとめと後期以後の修論の取り組み：	千賀	(7/23)
第 1 回	「心理学研究法特論」のオリエンテーション：	千賀	(4/7)																																																											
第 2 回	研究計画書の書き方・研究倫理：	千賀	(4/7)																																																											
第 3 回	研究法各論（質問紙調査法）：	吉野	(4/21)																																																											
第 4 回	研究法各論（事例研究法）：	早川	(4/21)																																																											
第 5 回	研究法各論（実践研究）：	堀	(5/12)																																																											
第 6 回	研究法各論（実験・検査法）：	福元	(5/12)																																																											
第 7 回	研究法各論（面接法・質的研究）：	千賀	(5/26)																																																											
第 8 回	研究法各論（介入研究）：	千賀	(5/26)																																																											
第 9 回	各自の研究計画書の発表と討論（1）：	千賀	(6/9)																																																											
第 10 回	各自の研究計画書の発表と討論（2）：	千賀	(6/9)																																																											
第 11 回	各自の研究計画書の発表と討論（3）：	千賀	(6/23)																																																											
第 12 回	関連論文講読：	千賀	(6/23)																																																											
第 13 回	関連論文講読：	千賀	(7/7)																																																											
第 14 回	関連論文購読：	千賀	(7/7)																																																											
第 15 回	まとめと後期以後の修論の取り組み：	千賀	(7/23)																																																											
事前学習の内容・学習上の注意	学部レベルの「心理学研究法」については習得、復習しておくこと。																																																													
本科目の関連科目	心理統計法特論																																																													
テキスト	特に指定しない。																																																													
参考文献	西條剛央『ライブ講義 質的研究とは何か SCQRM ベーシック編』新曜社、2007 年 西條剛央『ライブ講義 質的研究とは何か SCQRM アドバンス編』新曜社、2008 年 サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編『質的研究法マッピング』新曜社、2019 年																																																													
成績評価方法と基準	研究法各論および関連論文の発表、討論へのコミットメント（50%）、研究計画書の作成（50%）により評価を行い、全体で 60%以上を合格とする。																																																													

科目名	心理統計法特論	2 単位
担当者	千賀則史	
テーマ	心理尺度の構成および相関研究の実践を通して、各種心理統計の技法を習得する	
科目のねらい	<キーワード> 記述統計、推測統計、心理尺度の構成、項目分析、相関研究 <内容の要約> 本特論では心理学研究の基礎的な統計手法について、実践を通して習得する。そのため、心理尺度を自身で作成し、この尺度によって測定される特性とパーソナリティの主要5因子との関係を調べる相関研究を実践する。まず記述統計と心理尺度の構成、および相関研究に関する基礎的な学習を行ない、質問紙を完成させる。その後各自で収集したデータをもとに、心理尺度の構成において求められる項目分析や因子分析、さらにパーソナリティとの相関研究などにより、各種の心理統計技法を学ぶ。解析は統計パッケージ（SPSS）を使用する。 <学習目標> ① 心理学研究に用いられる統計の基礎を理解することができる。 ② 各種統計手法を用いた心理データの分析を実施することができる。 ③ 心理尺度の構成を自身で行うことができる。	
授業の進め方	第1回 イン트로ダクション 第2回 記述統計と尺度構成の基礎 第3回 尺度項目の作成 第4回 相関研究の基礎 第5回 質問紙の作成 第6回 基本統計量の算出 第7回 推測統計の基礎 第8回 項目分析（I-T 相関）、信頼性分析 第9回 因子分析1 第10回 因子分析2 第11回 t 検定 第12回 分散分析 第13回 クロス集計とカイ二乗検定 第14回 その他の解析 第15回 まとめ	
事前学習の内容 学習上の注意	演習内容は知識やスキルを積み上げていく構成となっている。そこで各回各自で復習を行い、学習内容を習得していることを前提とする。また授業時間外にデータ収集など課題を課すことがある。なお、授業では統計解析パッケージ（SPSS）を使用する。受講生にはPC 操作の基礎的技能が求められる。	
本科目の関連科目	心理学研究法特論	
テキスト	使用しない（レジュメを使用する）。	
参考文献	授業内で指示する。	
成績評価 方法と基準	課題レポート（30%）、演習への積極的参加度（30%）、最終レポート（40%）により評価を行い、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	人格心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）	2 単位
担当者	小塩真司	
テーマ	人間の心理学的個人差と個人差概念を探究する	
科目のねらい	<キーワード> 1. パーソナリティ, 2. 教育, 3. 心理測定, 4. 発達, 5. 適応 <内容の要約> パーソナリティ心理学を中心に, 教育や発達など周辺領域を含む心理学的な個人差を扱う研究知見について理解を深める。パーソナリティ心理学は, 長い歴史をもち教育場面・臨床場面をはじめとする他分野にも広く応用されてきた。近年では, 多くのデータと統計処理手法によって, 人間の直観的理解を超えた研究知見が数多く生み出されてきている。講義と論文の紹介を通じて, パーソナリティ心理学の歴史的変遷と研究知見, 研究方法, 個人差の測定方法を学び, 人間の個人差を理解することができる。 <学習目標> 臨床心理にかかわる心理学的個人差について理解することができる。 心理学的な個人差概念を用いて, 適切な問題意識のもとに研究を計画することができる。	
授業の進め方	第1回 導入：パーソナリティ心理学とは 第2回 人間の個人差を考える 第3回 パーソナリティ概念を理解する 第4回 パーソナリティに関する論文を読む（1） 第5回 類型論と特性論 第6回 語彙仮説から一般因子の探究へ 第7回 Big Five パーソナリティの発見 第8回 パーソナリティに関する論文を読む（2） 第9回 パーソナリティ尺度・パーソナリティ検査 第10回 発達について考える 第11回 現実社会のなかのパーソナリティ 第12回 パーソナリティに関する論文を読む（3） 第13回 「よいパーソナリティ」という考え方 第14回 現実への応用：心理アセスメントと心理学的支援 第15回 パーソナリティに関する論文を読む（4）	
事前学習の内容・学習上の注意	心理学の基礎的な知識および, 調査的手法を用いた心理学の基礎的な知識を前提として講義を行う。参考図書のいずれかに目を通し, 理解を深めることが望ましい。	
本科目の関連科目	臨床心理査定演習 I, 心理統計法特論, 家族・集団・地域支援特論	
テキスト	なし	
参考文献	小塩真司 (2024). 「性格が悪い」とはどういうことか—ダークサイドの心理学 筑摩書房 小塩真司 (2021). 非認知能力：概念・測定と教育の可能性 北大路書房 小塩真司 (2020). 性格とは何か 中央公論新社	
成績評価方法と基準	授業への参加の様子及びコメントシート（50%）と最終レポート（50%）を総合的に評価する。総合評価60点以上を合格とする。	

科目名	教育臨床心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）		2 単位																																													
担当者	辻野 達也																																															
テーマ	子どもと保護者、学校を援助する方法について学ぶ																																															
科目のねらい	<キーワード> 学校臨床、スクールカウンセラー、心理教育、コンサルテーション、学習支援 <内容の要約> スクールカウンセラーとして心理職が学校に入り、子どもの発達・学習支援や臨床心理学的な支援を行う意義とその方法について学ぶ。子ども・保護者との相談、教員との連携、学校・地域への支援方法について、事例検討・ディスカッションを通して学んでいく。 <学習目標> 学校臨床の枠組みについて学び、スクールカウンセラーとしての職務、具体的な支援方法（個別支援、他職種との連携）について理解することができる。																																															
授業の進め方	授業では、学校臨床の基礎的な知識と実践について広く学ぶため、講義・ディスカッション・事例検討などを行う。 <table><tr><td>第 1</td><td>回</td><td>オリエンテーション・スクールカウンセラー制度について</td></tr><tr><td>第 2</td><td>回</td><td>スクールカウンセリングの枠組み・子どもの発達課題の理解</td></tr><tr><td>第 3</td><td>回</td><td>3 段階の心理教育的援助サービスと心理教育</td></tr><tr><td>第 4</td><td>回</td><td>発達障害の理解と支援（ASD/ADHD）</td></tr><tr><td>第 5</td><td>回</td><td>発達障害の理解と支援（SLD）</td></tr><tr><td>第 6</td><td>回</td><td>特別支援教育（通常学級・特別支援学級・通級・特別支援学校）</td></tr><tr><td>第 7</td><td>回</td><td>アセスメント（知能検査）</td></tr><tr><td>第 8</td><td>回</td><td>アセスメント（発達検査）</td></tr><tr><td>第 9</td><td>回</td><td>アセスメント（適応行動）</td></tr><tr><td>第 10</td><td>回</td><td>学習支援・発達支援</td></tr><tr><td>第 11</td><td>回</td><td>不登校・いじめの理解と対応</td></tr><tr><td>第 12</td><td>回</td><td>学校における危機対応</td></tr><tr><td>第 13</td><td>回</td><td>校内・校外連携、コンサルテーション（他職種連携）</td></tr><tr><td>第 14</td><td>回</td><td>保護者との連携</td></tr><tr><td>第 15</td><td>回</td><td>まとめ</td></tr></table>			第 1	回	オリエンテーション・スクールカウンセラー制度について	第 2	回	スクールカウンセリングの枠組み・子どもの発達課題の理解	第 3	回	3 段階の心理教育的援助サービスと心理教育	第 4	回	発達障害の理解と支援（ASD/ADHD）	第 5	回	発達障害の理解と支援（SLD）	第 6	回	特別支援教育（通常学級・特別支援学級・通級・特別支援学校）	第 7	回	アセスメント（知能検査）	第 8	回	アセスメント（発達検査）	第 9	回	アセスメント（適応行動）	第 10	回	学習支援・発達支援	第 11	回	不登校・いじめの理解と対応	第 12	回	学校における危機対応	第 13	回	校内・校外連携、コンサルテーション（他職種連携）	第 14	回	保護者との連携	第 15	回	まとめ
第 1	回	オリエンテーション・スクールカウンセラー制度について																																														
第 2	回	スクールカウンセリングの枠組み・子どもの発達課題の理解																																														
第 3	回	3 段階の心理教育的援助サービスと心理教育																																														
第 4	回	発達障害の理解と支援（ASD/ADHD）																																														
第 5	回	発達障害の理解と支援（SLD）																																														
第 6	回	特別支援教育（通常学級・特別支援学級・通級・特別支援学校）																																														
第 7	回	アセスメント（知能検査）																																														
第 8	回	アセスメント（発達検査）																																														
第 9	回	アセスメント（適応行動）																																														
第 10	回	学習支援・発達支援																																														
第 11	回	不登校・いじめの理解と対応																																														
第 12	回	学校における危機対応																																														
第 13	回	校内・校外連携、コンサルテーション（他職種連携）																																														
第 14	回	保護者との連携																																														
第 15	回	まとめ																																														
事前学習の内容 学習上の注意	配布資料や参考文献等を読んでおくこと																																															
本科目の 関連科目	人格心理学特論																																															
テキスト	授業内で資料を配布する																																															
参考文献	青木真理 スクールカウンセラーのための仕事術 明治図書出版 2024 かしまえりこ、神田橋條治 スクールカウンセリングモデル 100 例 創元社 2006 村瀬嘉代子監修 学校が求めるスクールカウンセラー 遠見書房 2013 福岡県臨床心理士会編 学校コミュニティへの緊急支援の手引き（第 3 版） 金剛出版 2020																																															
成績評価 方法と基準	授業態度、討論への参加、レポート等の平常点を総合して評価する（100%）。全体で 60%以上を合格とする。																																															

科目名	家族・集団・地域支援特論（家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践）	2 単位
担当者	石川 佳奈	
テーマ	家族関係，集団，地域社会に焦点を当てた心理支援の理論と方法について学び，実践に活かす。	
科目のねらい	<キーワード> 家族支援，児童虐待，発達障害，緊急支援，ジェンダー・セクシュアリティの多様性 <内容の要約> 家族関係等に焦点を当てた心理支援の理論と方法，地域社会や集団に働きかける心理学的援助，さらに社会的な課題である被災地支援やジェンダー・セクシュアリティの心理に関する相談や臨床実践の応用について学び，包括的に理解する。 <学習目標> 現代の家族をめぐる課題について理論・実践の両面から包括的に理解できる。 緊急支援および被災地支援の実践における知識とスキルと態度を理解できる。 社会問題について開かれた多様な視点で心理支援を考えることができる。	
授業の進め方	第 1-2 回 オリエンテーション / 家族・家族心理学とは 第 3 回 現代の家族・親子関係をめぐる様々な課題 第 4-5 回 家族療法の諸理論と技法 第 6 回 地域社会支援：コミュニティ心理学とは 第 7-8 回 医療領域における家族支援 第 9-10 回 保育領域における家族支援 第 11 回 緊急支援：学校における緊急支援 第 12 回 緊急支援：被災地における緊急支援 第 13-14 回 ジェンダー・セクシュアリティの多様性における家族・地域・社会支援 第 15 回 まとめ	
事前学習の内容・学習上の注意	○本授業は，3日間の集中講義として実施する。 ○授業は，講義と学生間のディスカッションで構成されている。そのため，知識を学ぶだけでなく，学んだ知識を活かしてディスカッションに主体的，積極的に取り組むことが求められる。 ○上記の取り組みを通し，心理学的な洞察を深め，支援への理解を深めることを期待する。	
本科目の関連科目	臨床心理学特論，心の健康教育特論，など	
テキスト	テキストは使用しない。適宜レジュメを使用する。	
参考文献	柏木恵子 編著『よくわかる家族心理学』ミネルヴァ書房（2010） 日本家族心理学会 編『家族心理学ハンドブック』金子書房（2019） 植村勝彦・高畠克子・箕口雅博・原裕視・久田満 編『よくわかるコミュニティ心理学（第 3 版）』（2017）ほか適宜紹介する	
成績評価方法と基準	評価方法は，授業への参加度や課題等への取り組み姿勢（主体的，積極的）70%，レポート 30%で評価し，総合評価 60 点以上を合格とする。なお，2/3 以上の出席がない場合は評価の対象とならない。	

科目名	犯罪心理および被害者支援特論 (司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開)	2 単位
担当者	山田麻紗子	
テーマ	司法における非行や犯罪の手続き理解と立直り支援および犯罪被害者支援について	
科目のねらい	<キーワード> 1. 司法における手続きの枠組み 2. 非行・犯罪の面接調査技術 3. 児童虐待 4. 犯罪被害者支援の展開 5. 司法分野の心理職 <内容の要約> 本講義では①司法における関連法や関係機関、②心理臨床・社会的な視点から非行・犯罪の背景要因やそこに至る経過等から事件の真相を理解する。また、立直り支援に役立つ知識・技術等の取得ができるよう事例を交えて理解を深める。 更に、加害者が抱える被害性に視点を当て、被害と加害の一体性、被害性への心理的支援の実際について学習する。海外の被害者支援等についても紹介する。 <学習目標> ・非行と犯罪の違い、少年・刑事司法の理念や手続きの相違、冤罪の生じる背景、裁判員裁判などの知識を事例、担当者の実務体験を通して広く学ぶことができる。 ・非行・犯罪の背景要因である児童虐待について学ぶことで、心理臨床に福祉的視点を加味した理解や支援の大切さが理解できる。	
授業の進め方	第1回 犯罪・非行心理学への招待（ガイダンス）：司法の法的枠組み、少年法の理念、関係機関の役割機能と連携 第2回 犯罪・非行心理学の基礎(1)：犯罪・少年非行の推移と現況、課題 第3回 犯罪・非行心理学の基礎(2)：非行・犯罪心理学の主な理論 第4回 犯罪・非行心理学の基礎(3)：犯罪・非行の背景要因となる児童虐待 第5回 犯罪・非行心理学の基礎(4)：非行・犯罪の面接調査方法 第6回 犯罪被害者支援の歴史と展開 第7回 海外における児童虐待対応および性的被害児・者支援 第8回 前半の振り返りとまとめ、後半への準備（質疑応答） 第9回 加害と被害の心理（事例から学ぶ） 第10回 事例から心理臨床的立直り支援の実際を学ぶ 第11回 取り調べの心理学と裁判員裁判の基礎 第12回 事例を通して取り調べの心理、冤罪の背景を学ぶ(1) 第13回 事例を通して取り調べの心理、冤罪の背景を学ぶ(2)、意見交換 第14回 ゲスト講師を予定 第15回 全体の振り返りとまとめ（公認心理師試験の問題を解く）	
事前学習の内容・学習上の注意	・レジメ内で参考文献を示すので、2, 3 冊は読むこと。 ・毎回授業で出て来る専門用語の意味等を復習し、理解すること。 ・新聞を読み、少年非行や成人犯罪の動向、いじめ、不登校、自殺等から現代社会を広く知るよう心がけること。 ・毎回の授業終了時に、次回講義の案内をするので可能な予習をすること。	
本科目の関連科目	発達臨床心理学特論 家族・集団・地域支援特論 精神医学特論 ソーシャルワーク論	
テキスト	テキストの代わりにレジメを授業開始前に配布する。	
参考文献	授業内で紹介する。	
成績評価方法と基準	レポート（70点）、授業・ディスカッションへの参加度（30点）の方法で評価を行い、全体で60点以上を合格とする。	

科目名	精神医学特論（保健医療分野に関する理論と支援の展開）	2 単位
担当者	石島 洋輔	
テーマ	精神疾患や発達障害の知識を習得し、心理的支援の実践につなげる	
科目のねらい	<キーワード> 精神医学、診断基準、精神療法、発達障害、心的外傷後ストレス障害（PTSD） <内容の要約> 主な精神疾患について、症状・経過・診断・治療の基本的なことがらを解説し、臨床現場での適切な心理・社会的な対応の工夫について学ぶ。今日の社会におけるメンタルヘルスの課題や展望について議論し、文献や事例を通して考察を深める。 <学習目標> ＊各精神疾患の心理学的特徴を把握し、その知識を心理療法的アプローチに応用することができる ＊保健医療分野において他職種と専門的連携をおこなうことができる	
授業の進め方	第1回 精神疾患総論、精神科の診断（1） 第2回 精神疾患総論、精神科の診断（2） 第3回 精神疾患の心理社会的治療 第4回 うつ病と双極性障害 第5回 依存症 第6回 摂食障害 第7回 心的外傷後ストレス障害（PTSD）とトラウマ治療（1） 第8回 心的外傷後ストレス障害（PTSD）とトラウマ治療（2） 第9回 不安症・強迫症（1） 第10回 不安症・強迫症（2） 第11回 発達障害（1） 第12回 発達障害（2） 第13回 精神科リハビリテーション 第14回 論文の抄読・発表および討論（1） 第15回 論文の抄読・発表および討論（2）	
事前学習の内容 学習上の注意	日頃から授業で取り上げる内容と関連する最近の話題に関心を持ち、書籍等で自発的に探究し基礎知識を養っておくことを求める。 講義内容の予習および授業中の配布資料の復習をする。第14回・15回については討議用の論文を配布するので読んでおくこと。	
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ、教育臨床心理学特論、発達臨床心理学特論、など	
テキスト	とくに指定しない	
参考文献	「こころの医学入門」近藤直司・田中康雄・本田秀夫編集 中央法規出版 「赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア」白川美也子著 アスク・ヒューマン・ケア 「精神療法面接のコツ」神田橋條治著 岩崎学術出版社	
成績評価 方法と基準	コメントカード（60点）、ディスカッションへの参加度（20点）、プレゼンテーション・発表資料（20点）により評価し、総合評価をおこない、60点以上を合格とする。	

科目名	心の健康教育特論（心の健康教育に関する理論と実践） 〔隔年開講（予定）、2025 年度開講〕	2 単位
担当者	小松原智子	
テーマ	心の健康に関する知識の普及方法や情報提供の方法について、体験的に学ぶ	
科目のねらい	<キーワード> 心の健康、ストレスマネジメント、心理教育、家族への支援 <内容の要約> 心の健康に関する知識の普及を図るための教育および情報の提供を行うにあたり、一般の方々にわかりやすくかつ有益な伝え方について、実際にプレゼンテーションを行いながら、実践的に学ぶ。また、心理的に問題を抱える本人やその家族にその対応を伝える心理教育について、その意義や方法を学ぶ。 <学習目標> ・心の健康教育のために必要な知識を理解し、平易に説明することができる ・心の健康教育に関するプログラムを提案し、実践することができる ・当事者やその家族等を支援するための心理教育に必要な視点を理解できる	
授業の進め方	「心の健康」に必要な知識を学ぶとともに、領域ごとに必要な工夫のために諸原則を学ぶ。心理的負荷の把握や適応の視点、コミュニケーション、自己理解・表現、感情のコントロールの工夫など、ワークやディスカッションを取り入れ、体験的に理解を深める。さらに、事例を用いてディスカッションを行うことで理解を深める。また、授業で学んだ知識をもとに、それぞれが領域に合わせた心の健康教育ができるよう予防プログラムの作成、実践を行う。 第1・2回 オリエンテーションー「心の健康」とは 第3～5回 セルフケア、ストレス対処法、自己表現 第6～8回 心の健康教育の領域毎の工夫 第9・10回 家族支援、支援者支援の視点 第11～14回 心理教育プログラム実践 第15回 まとめ	
事前学習の内容・学習上の注意	参考文献に挙げた図書の他、関連法令・通達を各自事前学習すること。 プレゼンテーションのための資料は、発展的学習として、個々に専門文献を調べて作成すること。また、提示の際には、その出典を明確にしながら用いること。	
本科目の関連科目	臨床心理面接特論Ⅰ・Ⅱ、精神医学特論、教育臨床心理学特論、犯罪心理および被害者支援特論、産業・労働心理学特論	
テキスト	使用しない。適宜レジュメを配布する。	
参考文献	平木典子(2012)『アサーション入門：自分も相手も大切に自己表現法』講談社現代新書 平木典子(2013)『図解相手の気持ちをきちんと「聞く」技術：会話が続く、上手なコミュニケーションができる!』PHP 研究所 日本睡眠学会教育委員会(2020)『不眠症に対する認知行動療法マニュアル』金剛出版 ロナルド T.ポッターエフロン、パトリシア S.ポッターエフロン著/藤野京子監訳(2016)『アンガーマネジメント 11 の方法：怒りを上手に解消しよう』金剛出版 島津明人編著(2014)『職場のストレスマネジメント：セルフケア教育の企画・実施マニュアル』誠信書房 久田満・飯田敏晴編『心の健康教育』金子書房、2021	
成績評価方法と基準	評価方法は課題レポート・発表（70%）、授業での討論の参加など取り組み姿勢（30%）で評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。なお、2/3 以上の出席がない場合は評価の対象とならない。	

科目名	投映法特論	2 単位
担当者	早川すみ江	
テーマ	投映法検査の中のロールシャッハ・テストとバウムテストについて、事例をもとに討論を通して、分析・解釈の理解を深める。	
科目のねらい	<キーワード> 1.投映法検査, 2.テストバッテリー, 3.臨床心理査定, 4.精神力動的理解, 5.パーソナリティ <内容の要約> 投映法検査は、質問紙法や作業検査法に並び、パーソナリティを査定する上で優れた技法である。他の検査法に比べ個別的で、より詳しくパーソナリティを査定することが可能な分、その技法を習得するのは容易ではない。 本講座では、投映法検査の中でも、特にロールシャッハ・テストの分析・解釈ができるようになることを目的とする。ロールシャッハ・テストから、被験者のパーソナリティを査定し、その結果を援助に役立てる方法を身に付けていくことを目指す。またテストバッテリーについて理解し、ロールシャッハ・テストとバウムテストから、被験者のパーソナリティを立体的に描くことができるようにする。 <学習目標> ・投映法検査であるロールシャッハ・テストの分析に必要な専門的知識および技法を習得し、適切な解釈をすることができる。 ・ロールシャッハ・テストとバウムテストを通して、クライアントの抱える心理的問題を含めたパーソナリティを見立て、心理ならびに近接領域の専門家に説明することができ、援助に活かすことができる。 ・投映法検査を実施する上での倫理的諸問題を理解することができる。	
授業の進め方	1 年次の「臨床心理査定演習Ⅱ」の課題として実施した投映法検査（ロールシャッハ・テスト及びバウムテスト）データを、各自が分析・解釈をして発表し、討論することを通して、実際の分析・解釈の方法を身に付けていく。 第1回：オリエンテーション（発表の仕方） 第2～3回：ロールシャッハ・テストの解釈の実際例 第4～14回：事例発表と討論 第15回：まとめ	
事前学習の内容・学習上の注意	・「臨床心理査定演習Ⅱ」の課題として実施したロールシャッハ・テストは、授業のはじめまでに、スコアリング・結果の整理・形式分析までしておくこと。 ・「臨床心理査定演習Ⅱ」で取りあげた文献『精神力動論』で学んだことをもとに、継起分析と総合解釈を行い、発表の準備をすること。	
本科目の関連科目	臨床心理査定演習Ⅰ・Ⅱ	
テキスト	・『精神力動論』小此木啓吾・馬場禮子著 金子書房（事務室より各自に貸し出しますので、購入の必要はありません） ・『改訂 新・心理診断法』片口安史著 金子書房（希望者には、事務室より貸し出します）	

参考文献	・ 馬場禮子著「ロールシャッハ法と精神分析」岩崎学術出版社 ・ 馬場禮子著「境界例　ロールシャッハ・テストと心理療法」岩崎学術出版社 ・ ジェームズ・H・クレージャー著「思考活動の障害とロールシャッハ法」創元社 ・ 加藤志ほ子著「ロールシャッハ・テストの所見の書き方」岩崎学術出版
成績評価方法 と基準	発表レポート（70％）・討論への参加度（30％）により評価し、全体で 60％以上を合格とする。

科目名	心理療法特論	2 単位
担当者	高橋 蔵人、小松原 智子、辻野 達也	
テーマ	来談者中心療法、認知・行動療法、芸術（表現）療法	
科目のねらい	<キーワード> 来談者中心療法、イメージを媒介とする心理療法、治療構造、芸術療法 <内容の要約> ①来談者中心療法について講義と事例検討を通して学ぶ。 ②認知行動療法の基本的な枠組みと支援の視点を、実践や事例を通して学ぶ。また、セルフケアや健康的な自己表現など、健康的・予防的な観点への活用について学ぶ。 ③芸術療法やイメージを媒介とする技法がもたらす治癒促進的な働きと禁忌について、講義と実習により経験的に学ぶ。それぞれの手法がもつ性質を理解することで、臨床状況（場所、対象、経過など）に応じた適用上の工夫や配慮ができるよう、実習、具体的場面の想定、事例の提示を通じて詳細に解説する。 <学習目標> ①来談者中心療法の講義および事例検討を通して、セラピーにおいてこういったことが大切か理解を深めることができる。 ②認知行動療法の概念を理解し、対人支援やセルフケアに応用することができる。 ③芸術療法、イメージを媒介とする心理療法がもつ性質と治癒機序を経験的に理解し、心理療法全般に応用することができる。意識と無意識及びクライアントとセラピストの相互交流過程に関わりながら、同時にそれを客観的内省的に捉えることができる	
授業の進め方	第1回 : オリエンテーション・来談者中心療法の概要 第2・3回 : 来談者中心療法についての枠組み 第4・5回 : 事例検討 第6・7回 : 認知行動療法の理論の変遷と基本知識の概説、 健康的な認知的理解と自己表現（認知変容、アサーティブな表現） 第8・9回 : セルフマネジメント 第10回 : 事例検討 第11・12回 : 芸術療法（コラージュ療法） 第13・14回 : イメージを媒介とする心理療法（夢分析） 第15回 : イメージを媒介とする心理療法（ウォッチワード・テクニック）	
事前学習の内容 学習上の注意	・理解を深めるため、事前学習や作業課題を提示することがある。 ・実習的授業内容については、授業への出席が心理的負担とならないような配慮を行う。	
本科目の 関連科目	臨床心理面接特論Ⅰ・Ⅱ、臨床心理基礎実習、臨床心理学特論、臨床心理実習Ⅰ - ①②	
テキスト	授業での紹介文献、および配布資料。	
参考文献	領域が多岐に及ぶため、適宜授業で紹介する。 カール・ロジャーズ著 伊東博・村山正治（監訳）『ロジャーズ選集』誠信書房、2001 下山晴彦『認知行動療法を学ぶ』金剛出版、2011 坂野雄二監修『60 のケースから学ぶ認知行動療法』北大路書房、2012 やまだようこ編『この世とあの世のイメージ描画のフォーク心理学』新曜社、2010 杉浦京子『コラージュ療法』川島書店、1994 河合俊雄編著『ユング派心理療法』創元社、2013 マイケル・ダニエルズ著 老松克博訳『「私」をみつける心理テスト～ウォッチワード・テクニックの世界』創元社、2000	
成績評価 方法と基準	ディスカッションへの参加（40%）、課題への取り組み（30%）、 提出レポート（30%）により評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。	

□医療・福祉専門科目

科目名	ソーシャルワーク論	2 単位
担当者	田中 千枝子	
開講形態	対面形式	
テーマ	ソーシャルワークを理論や方法論として学び、事例研究やロールプレイやカンファレンス体験などを通じて理解する	
科目のねらい	<キーワード>①ソーシャルワーク ②実践理論 ③社会福祉方法論 ④ミクロ・メゾ・マクロ実践 ⑤専門性 <内容の要約>ソーシャルワーク実践の基盤となる考え方や方法を示すソーシャルワーク実践理論やアプローチに関する基本的知識や支援観や視点を得ることによって、特にミクロからメゾレベルのソーシャルワークの専門性の確認をする。また実践事例を分析し、グループ作業によりコミュニケーションをはかる体験をすることで、価値に基づく知識・技術を検証し、さらにそれを専門職のコンピテンスとして身に着けるために集団学習およびレポート作成によるセルフワークによる学習を行う。 方法としては、実際の事例に対して様々な教育的手法により実践理論・モデル・アプローチを適用し、参加型授業によって個人・集団・地域等一定の視点からの事例の展開を観察し理解し分析し、解釈および評価するプロセスを追い、事例検討の流れを体験する。 <学習目標>人の生活/人生に着目し、社会的枠組みにおいて福祉的課題を設定し、その科学的視点を身に着けることによって、ソーシャルワークの実践方法を理解し、組織・地域・制度に対して、働きかけることができる。ソーシャルワークの理論や展開過程を問題解決に応用する能力として身に着け、多職種に対するコミュニケーションやプレゼンテーション等のマネジメントスキルの研鑽に役立てることを目的とする。	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 授業契約 第 2 回 SWの実践理論概論講義 第 3 回 援助観・価値観の理論的変遷 事例による検討 第 4 回 統合理論の概観 事例による検討 第 5 回 バイオ・サイコ・ソーシャルモデル ロールプレイ 第 6 回 エコシステム論と時間：空間的把握 エコマップ・タイムライン作成 G作業 第 7 回 ピンカス・ミナハンの4つのシステム理論、地域における多職種他機関連携を意識したエコマップ・タイムライン作成 G作業 第 8 回 GWに関する基礎理論概観 チームアプローチ協働の型 ロールプレイ 第 9 回 グループ力動論、司会の技術、事例検討、ロールプレイ KJ法によるGW 第10回 課題に対するプレゼンテーション技術 ディスカッションとリーダーシップ 第11回 地域福祉の技術と評価 調査研究 第12回 エンパワメント評価法 ワークショップのロールプレイ 第13回 SWリサーチ 介入計画の作成 第14回 ミクロ・メゾ・マクロに展開するSWとマネジメント レポート 第15回 グループ発表、まとめ、レポート作成	
事前学習の内容・学習上の注意	○前もって社会福祉学の基礎的な理論や概念の知識（教科書程度）を確認しておくこと ○ディスカッションやロールプレイなどG作業や演習形式を多用するので、積極的に参加すること ○専修や専攻を超えて様々な立場の学生が集まるので、多くの仲間を作るようにすること ○集中講義3日間 午前と午後計6回の授業内レポートを課し、理解の内容を確認する	
本科目の関連科目	医療・福祉マネジメント研究科「専門演習Ⅰ・Ⅱ」の考え方や論文作成の枠組みや問題提起に寄与する。なお本科目は「認定社会福祉士」の資格付与対象科目として認定されている。	
テキスト	木村容子・小原真知子編 「ソーシャルワーク論Ⅱー理論と方法ー」法律文化社 2023	
参考文献	渡部律子『福祉専門職のための統合的多面的アセスメント』ミネルヴァ 2020 ブトユリム・Z 『ソーシャルワークとは何か』川島書店 1986 その他資料配布	
成績評価方法と基準	集中授業 3 日間で、午前・午後の 2 回×3＝6 回 レポート提出 60% ディスカッションやロールプレイへの参加度 40% 総合評価により 60 点以上を合格とする。	

□医療・福祉実践科目

科目名	多職種連携概論	2 単位
担当者	篠田道子	
開講形態	対面形式	
テーマ	多職種連携の視点から医療・福祉サービスのマネジメントを考える	
科目のねらい	<キーワード> 多職種連携、医療福祉サービス、マネジメント、意思決定支援、リスクマネジメント <内容の要約> 少子高齢化や情報化の進行とともに、医療・福祉サービス、組織やチーム、リーダーシップのあり方が変化している。本講では多職種連携の視点から医療・福祉サービスのマネジメント（管理・運営・経営）を考える。ケースメソッド、事例検討など複数の方法を組み合わせながら多面的に検討する。授業では様々な多職種連携の場面にスポットを当て、自分がその場面の当事者であればどのように状況を理解し、そしてどのように意思決定し、組織やサービスを動かしていくのかを考える。 <学習目標> ・多職種連携の必要性和その実際を理解できる ・医療・福祉サービスのマネジメントを理解できる ・多職種連携の課題をミクロ・メゾ・マクロの視点から説明できる	
授業の進め方	第1・2回 オリエンテーション、自己紹介、多職種連携を高めるカンファレンス（ブレインストーミング、ケース教材によるディスカッション） 第3・4回 医療・福祉施設におけるリスクマネジメント 第5・6回 地域包括ケアシステムとネットワーク形成（院生による事例提供と討論） 第7・8回 業務改善と組織変革（院生による事例提供と討論） 第9・10回 医療・福祉サービスの国際比較 第11・12回 多職種で支える意思決定支援-終末期ケアに焦点を当てて- 第13・14回 静かなリーダーシップ（グループワーク＋発表） 第15回 全体のまとめ・リフレクション 本講義は、隔週2コマ連続とする。都合により内容と順番を一部変更する場合がある。	
事前学習の内容・学習上の注意	・事前に配布したケース教材を読み、課題シートに自分の考えをまとめ、グループワークで発言できるように準備しておくこと。 ・授業では双方向性を大切にしているので、院生の積極的な問題提起を歓迎したい。	
本科目の関連科目	ケースメソッド基礎、ケースメソッド演習	
テキスト	テキストは使用しない。レジュメ、ケース教材、実践報告、雑誌論文、新聞記事など多様な教材を使用する。	
参考文献	・篠田道子（2011）『多職種連携を高めるチームマネジメントの知識とスキル』医学書院 ・篠田道子（2023）『チームを成長させる会議・カンファレンス 35 スキル』日本看護協会出版会 ・J.バダラッコ、高木晴夫監修（2010）『静かなリーダーシップ』翔泳社	
成績評価方法と基準	・最終レポート（50点）、②平常点（50点）：コメントカード、事前課題、グループワークへの参加状況等で評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。 ・最終レポート：テーマは授業で扱う内容に関連するものを各自テーマ設定する。A4 版で 2000 字程度にまとめる。締め切りは 2025 年 7 月 31 日（木）。nfu.jp に提出する（授業初日に説明する）。	

□公認心理師資格必修科目

科目名	臨床心理実習Ⅰ－⑤（心理実践実習）	2 単位
担当者	小松原智子・辻野 達也・高橋 蔵人 瀬地山葉矢*・福元 理英*・早川すみ江*・堀美和子*・千賀則史*・吉野真紀* *巡回指導担当	
テーマ	学外施設での実習を通じて、心理臨床活動の実際的な知識と技術を学ぶ。	
科目のねらい	<キーワード> 学外実習、心理職業の実際、心理的支援、他職種連携と地域支援、職業倫理と法的義務 <内容の要約> 学外実習（学外施設での実習）と事前・事後の学習を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、心理的支援の実際について理解を深め、支援を実践していく力を養う。学外施設では実習先の指導担当者および大学の実習担当教員（各実習施設の指導を担当する巡回指導教員）による指導のもとに実務を体験し、実践を通じて心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務などを学ぶ。 <学習目標> ・心理臨床とその近接領域に関する専門知識および基礎となる対人関係能力をふまえて、さまざまな臨床場面、多様な対象に適切に臨むことができる。 ・心理臨床の実務を体験し、心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務について理解することができる。	
授業の進め方	【授業】 授業については、臨床心理実習Ⅰ－④内で行うものとする。 【学外実習】 <実習期間・内容> ・臨床心理実習Ⅰ－③、④の実習に加えて、更に学外実習施設における実習を希望する者に対して行う。公認心理師資格を受験する場合は必修科目である。 ・原則 1 箇所、実習施設ごとに指定された日程で、10 日間（毎週の継続、または連続した日程・1 日 6 時間程度）の実習を行う。 ・実習生は、支援に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、（ア）から（オ）の事項について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員（巡回指導教員）による指導を受けて修得していく。 （ア）心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等の知識及び技能の修得 （イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成 （ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ （エ）多職種連携及び地域連携 （オ）臨床心理士及び公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解 <実習準備・実習指導> ・実習先が決まった実習生は、「実習の手引き」（授業内で配布）を熟読し、事前準備や実習計画書の作成を行い、実習担当教員（巡回指導教員）から、学外施設への実習事前訪問に関する打ち合わせや指導を受ける。 ・実習生は、学外実習施設の実習指導者および実習担当教員と、事前訪問による打ち合わせ（実習オリエンテーション）や施設見学を行う。 ・実習期間中は、学外実習施設の実習指導者の指導を受けて施設実習を行い、実習報告を毎回作成すると同時に、実習担当教員による実習指導や施設での訪問指導を受ける。訪問指導は 10 日間の実習の場合、5 回につき 1 回、計 2 回受ける。	

	<参考> 公認心理師の資格取得を目指す場合には、以下の実習時間が必要とされる。2年間で原則、下記の領域および時間数を行うものとする。 ・学外施設での担当ケースに関する実習の時間は90時間以上とする（なお、学内実習と合わせた担当ケースの実習時間数は270時間以上とする）。 ・実習施設は、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の5分野うち、医療機関は必須とし、3分野以上の施設において実習を受けることが望ましい。医療機関以外の施設においては、見学を中心とする実習も含む。
事前学習の内容 学習上の注意	・学外実習は原則毎週の継続、または連続した日程で行うこと ・各実習先に必要な基礎知識や心理検査技法を事前に勉強しておくこと
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ－②、臨床心理実習Ⅰ－③、④
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	・津川律子・橘玲子編『臨床心理士をめざす大学院生のための精神科実習ガイド』誠信書房、2022 ・津川律子・篠竹利和『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房、2010 ・鑪幹八郎・名島潤慈『心理臨床家の手引[第4版]』誠信書房 2018 ・滝川一廣『子どものための精神医学』医学書院、2017 ・一般社団法人日本公認心理師養成機関連盟編『公認心理師養成の実習ガイド』日本評論社、2019 ・東畑開人『居るのはつらいよーケアとセラピーについての覚書』医学書院、2019 ・窪田彰『精神科デイケアの始め方・進め方』、2004 ・窪田彰編『多機能型精神科診療所による地域づくり チームアプローチによる包括的ケアシステム』、2016 ・日本精神科病院協会監修 岸本年史編著『精神科研修ハンドブック』2005 海馬書房 ・笠原嘉著『予診・初診・初期治療 精神科選書Ⅰ』2007 星和書店 ・全国情緒障害児短期治療施設協議会編『心をはぐくむⅢー総合環境療法の臨床ー』2002 ・森田喜治『児童養護施設と被虐待児ー施設内心理療法家からの提言』創元社 2006 ・橋本和明『虐待と非行臨床』創元社 2004 ・黒田美保著『これからの発達障害のアセスメント：支援の一步となるために』、金子書房、2015
成績評価 方法と基準	以下のAの項目が達成されていることを条件とし、Bの各項目について評価して総合評価60点以上を合格とする。 A：①事前・事後の授業での発表、②1箇所10日程度での施設での実習 B：①事前学習による実習施設の理解、事前準備や打ち合わせでの積極的調整。②心理的支援の基本的態度・知識・技術の修得。多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務等についての理解。 ③実習態度（社会性・責任感・主体性・協調性・関係づくりなど）。④実習日誌等の実習記録の適切な整備。⑤実習報告書の内容と発表、実習体験の振り返りと自己の課題の理解